

淮南線は割に敵襲事故には見舞われずに済んだが、使用されていたレールが二十五キロその道床が軟弱なため、よく脱線してその復旧に追われていたものである。

我々現地のある者には知られていなかったが軍の上層部に於て淮南線の転用計画がす、められ淮南線約二百キロを二分割、その内南半分約百キロを裕溪口方面に、北半分を大通、水家湖に撤収集結すること、この北方面の保線区長を担任、昭和十九年某月某日開始と軍の命令を待つことになった。

その間に所要の資材、ガソリン等軍より支給を受け、要員計画も充分練ってその日を待った。

鉄道が新しく敷設されると云うことは地区住民の経済に与える影響の多いこと、これに反して撤収される地区の住民はどれほど悲しく、不利益となるか、そのための妨害が行われるのが非常に心配されていたものであった。

撤収の命令が下された日は朝からの豪雨で体はずぶ濡れ、靴はふやけ底が剥がれる始末で散々であった。

初日の作業はそのため予定の半分もできない状況であったが翌日からは一キロ、二キロ、三キロと仕事の馴れもあって一日に六キロも撤収、心配した妨害もなく約一か月で撤収作戦が完了し撤収材料の検査を受け、その管理を命ぜられたものである。

敗戦となり昭和二十一年四月に引揚げとなった。

人生を狂わした引揚げ

埼玉県 石山 幸

私は、昭和十五年四月、大阪の住友本社へ入社、同年十一月、住友本社北京事務所（住友公司）に転勤、昭和十九年二月現地召集、昭和二十年九月召集解除、住友公司に戻り、残務整理をして、同年十二月二十四日、命からがら実家にたどりついた。

昭和二十年九月、私は済南（秀嶺部隊）にいた。突然現地召集者は召集解除する旨の伝達があり、単身済南から北京まで長い時間を費やして会社にもどった。

会社の方々は心から喜んで下さり、二、三日ゆっくり休養後、会社の残務整理に取りかかった。数日過ぎた時、支店長から「今後どのくらい北京にいるか皆目判らないから、取り敢えず、三か月分の俸給を前払いするので受け取って欲しい」と言われた。

私は生来、お金をすぐ使いたくなる性分。そこで、俸給の一部を北京支店に預金し、少しずつおろして使おうと考えた。しばらくすると「近く朝鮮銀行が封鎖されそうだ」という噂が耳に入った。私はさっそく朝鮮銀行に行き、預金をおろそうとしたが、その時、すでに遅しで、封鎖された日だった。さあ、大変。一円もおろすことは出来ない。今後、いつ迄北京にいるか判らない。これ以上会社において、上司、同僚に迷惑をかけては申しわけないと考え、かつて住友に勤務、現在中国連合準備銀行にお勤めの小松さんの家に転がりこむ。先輩の小松さんは生後一年足らずの女の子と三人家族だったが、私に同情して、何くれとなく親切にして下さった。

「独身者は早く帰国出来る。いや妻帯者の方が先だ。

いやいや日本軍が長い間鉄道、道路、橋梁そして家屋等をあのように破壊したので、それを復旧してから帰国させるそうだ。東京を始め大都会は、みな焼野原になったそうだ。だから中国に帰化したほうがいい」等々。デマとは本当に恐ろしいものだ。時、昭和二十年十月。

かくしている内に、けつきよく独身者が先に帰国出来るようになり、居留民団に集合、嚴重な身体検査、物品検査を受け、住み馴れた北京を後に天津に向かった。平時ならば、北京・天津間は三時間弱で到着出来るが、恐らく十時間はかかったろう。ちよつと走っては、長い時間停車した。昭和二十年十一月末と記憶している。

列車は有蓋・無蓋の貨物列車。お金は千円だけは所持出来た。北支の十二月はなんといつても寒い。あまりにも寒いので、ある者はたいせつに所持していた毛布を中国人と高粱酒と交換し、若い主婦は幼児を胸に覆い、寒気を防ぐ。そして重なりあつて列車の中で横になった。しかし、とても寝られるどころではない。

やつとの思いで天津に到着、帰還邦人収容所に入れられた。そこは今でいう大きな雨天操場のような、倉庫のような建物で、火は絶対使用禁止。先着の邦人が何千人という。当時北京市だけでも邦人は十五万人いたのだから北支全体では何十万の人になる。

長い間歩きさまよい、また列車に乗って、やつと天津にたどり着いた奥地からの引揚者の姿は、実にあわれであり、浮浪者で、一見男女の別も判らない。

ある若い主婦は、生後間もない乳児を抱き、あるいは背負って食事等の仕事をしていたが、数日後、母乳不足か、寒さのためか、愛児を亡くした。しかし、火葬は許されず、泣き泣き愛児の爪、髪を切り土葬をした。このような気の毒な方が、二人、三人と出た。まさに生き地獄であった。

天津滞在中、何度も身辺、身体検査をされた。私共独身者は、老人、子供の食事の世話をし、十二、三日ぐらい滞在したであろう。外出は許されず、毎日単調な生活が続いた。

突然、今夜乗船出来る者の発表がある旨伝達された。

番号を言われない人は、乗船出来ない。幾日も幾日も天津に滞在、いつ帰国出来るか判らない。私はさいわい番号を呼ばれたので、その夜は嬉しくて嬉しくて、なかなか寝つかれなかった。

翌朝最後の身辺、身体検査が始まった。針、ナイフ等の刃物、中国の風景写真等は一切持って帰れない。或る人は虎の子の貴重品まで米軍、中国軍の係員に没収された。

冬の東支那海は荒れる。小さなL・S・T上陸用舟艇は、木の葉のように揺れる。一夜明けた。はるか東南方に、かすかに半島のようなものが見えた。九州だ。みんな甲板に駆け上がり眺めた。しかし、それはまだ山東半島だった。皆がっかりして船倉に戻る。食物らしい食物は与えられず、乾パンぐらいで幾日も幾日も過して来た私たちは、疲労困ぱいだったが、内地に着く迄は、お互いに頑張ろうと励まし合った。

やっと佐世保港に入港した。三日ほど、佐世保に滞在、種々検査を受け、十二月二十四日夜、夢に見た実家に着いた。

人間の運命ほど判らないものはない。私がいた部隊は関東軍にかわり、北支から満州に移動した。私は生来丈夫な体でなかつたので、済南の秀嶺部隊に転属になった。私が丈夫な体であつたなら、戦友と共に関東軍へ移動、終戦と共にシベリアへ送られ、おそらく私はこの世にいなかったらう。

大陸生活二十三年

埼玉県 小田 武夫

大正十二年、満鉄本社経理部に入社した。大陸に強い憧れをもっていたので嬉しかった。

大連は整然とした佇い。目抜き通りには三越、幾久屋デパート等が建ちならび、住宅地は赤い屋根、青い屋根、ガス・電気・水道は完備し、舗装道路わきにはアカシアの並木が連なり、無税港のためか物資は豊富、実に住み心地の良い街だった。

中国を理解するには、まず言葉からといちおうの努

力をした。

大連から旅順まで（四十キロ）のハイキングや戦跡巡り、一か月の夏タイム（午前中だけ勤務）には旅順線で大連から一時間の夏家河子海水浴場に友人とのテント生活等、青春を謳歌した。

昭和六年、満州事変勃発以後、世相は徐々に緊迫し遂に全面戦争に突入、軍は破竹の勢いで河北、山西両省を席捲。国民政府軍を黄河以西に敗退させたが、中国国民衆との融和、治安維持のために中国語を解す人が必要との軍の要請に、十三年一月から十二月まで、宣撫班長として河北省石門地区、山西省河津地区で軍行動を共にした。蒋介石は日本軍の占領は点と線のみと言ったが、事実占領した県城とそれを結ぶ自動車道を確保するのが精一杯、残りの広大な地域は八路军（現中国政府）が各部落に潜入して徹底抗戦を叫んでいた。わずか一年の宣撫工作だったが、今となっては懐かしい思い出がつぎつぎと浮かんでくる。

大部隊の戦闘に参加したり、小部隊で敵に遭遇、炎天下五時間に及ぶ戦い、スパイと目され銃殺寸前の者